二〇一二年八月二一日（参加者一四名）

浜の石灼けゐてベンチとはならず　つくし
佇めば我が足洗ふ秋の波　〃
沢蟹の奇岩の下に潜りけり　〃
波の騎羅打ち上げられし海月かな　〃
風鈴の音に反応す猫の耳　宏虎
今日一ト日無事を謝しつつ夕端居　〃
風に舞ひ夕陽を散らす赤とんぼ　〃
滔々と潮入り川の澄めりけり　わかば
泊舟のマスト林立秋の晴　〃
紺碧の海に散らばるヨットかな　〃
巖窟を懐に抱く秋の山　ぽんこ
身に入むや人寄せ付けぬ般若窟　〃
砲台は時代の遺物秋の風　〃
手水舎の水は山から涼新た　ひかり
涼風の野石をベンチ推敲す　〃
上げ潮の川のゆらぎや鰡屯　〃
魁やけやき並木に秋の色　きづな
お施餓鬼ををへて芭蕉碑に見えけり　〃
大いなるくもの囲宿す御神木　〃
電柱の影にバス待つ日の盛り　せいじ
さざ波に生れし風や湖涼し　〃
鉢苗を日除けの下に移しけり　〃
避暑便りキティの切手貼られあり　小袖
あきつ群る加速減速くりかへし　〃
新涼の夙川堤吟行す　百合
激辛のカレーを食べて暑に耐ふる　〃
秋めくと私を誘ふホ句の神　菜々
ベランダは私の宇宙星月夜　〃
難転石くるくる廻り涼新た　満天
爽やかや美人祈願の絵馬揺るる　〃
新涼や熱きコーヒーすすりけり　よし子
総玻璃の高層ビルに秋の雲　はく子

定例句会みのる選

二〇一二年八月二一日（参加者一四名）